

パイプオルガンのトリビア

～ vol.4 ～

パイプオルガンの鍵盤と楽器の内部を写した貴重な写真を紹介しましょう。ふた組の鍵盤、これが手鍵盤。写真は2鍵盤ですが、大規模な楽器になると3鍵盤、4鍵盤…とその数もふえていきます。それから手鍵盤の下にある木の棒、これが足鍵盤です。この足鍵盤で日本の民謡だろうが《トッカータとフーガ》であろうがW杯のテーマだろうが両足をつかって何でも演奏できます。

両手両足で複数の手鍵盤と足鍵盤を同時に弾き、右手、左手、足と3種類の音を同時進行させることが可能というわけです。私がパイプオルガンをはじめたのは東京芸大の3年生の時でしたが、写真のような楽器の仕掛けを初めて目撃した時の衝撃たるや。パイプオルガンを弾いていると実際に飛行機というかガンダムのコックピットの中に入ったような感じです。

鍵盤の左右についている丸いポッチのようなものは「オルガンストップ」。このポッチを出したりひっこめたりして音色を決めます。間違ったポッチを引けば、おっといけない、変な音が出てしまいます。両手両足を使っているし、パイプオルガンの演奏はそういう意味ではかなりスリリングですし、体力勝負の楽器です。

教会でパイプオルガンを聴いていると、石造りの残響も手伝ってパイプオルガンの音は空気全体をとりまいているように聞えてきます。心を空っぽにして目を閉じて聴いていると、なんとも心地いい笛の音色が上から降ってくる。音がまるで建築のように思えてきます。自分で演奏していても本当に癒されてしまいます。

さて、CDの収録といえば通常はスタジオにカンヅメになってマイクの前で演奏…を想像しますよね。パイプオルガンの演奏を録音する場合、スタジオではなく教会の中でマイクロフォンを設営して演奏を収録します。防音という概念は度外視の築ウン百年の教会で収録するわけですから、さあ大変。建物の外のトラム、車やバスが走る音…マイクロフォンは全て拾ってしまいます。そこでラッシュアワー後の夜から深夜にかけて収録します。「風のささやき」の第2集を収録の際には「飛行機が今通過したから、やり直し。よく弾けていたから惜しいけど」と言われたことも(涙)。

日本的な旋律に驚きながらも喜んで聴いてくれたオランダの老婦人。リハーサルで演奏したフォーレの《パヴァーヌ》のあの有名な旋律に合わせ嬉しそうに鼻歌をうたっていたアメリカ人の観光客。《ヴェニスの上》のオーボエの音色に涙した人たち。会場の驚きと感動の全てを私の3枚のCD「癒しのパイプオルガン」「風のささやき(Whispering Winds I & II)」を収録できたことは、演奏家冥利に尽きると感じる今日この頃です。

左：CD「Whispering Winds」収録の様子から。録音された演奏を出演者全員と録音エンジニアがサウンドチェックする。(写真右が筆者)



塚谷 水無子 (つかたに みなこ)

東京芸大卒業後オランダへ。オランダ、日本を中心に活動するオルガニスト。オランダでリリースされた2枚のCD「風のささやき1・2」(キングインターナショナル)、クラシックの名作を集めオルガンの魅力の全貌に迫るCD「癒しのパイプオルガン」(キングレコード) 大好評発売中。www.minakotsukatani.com



■ CD左・中央：「Whispering winds (風のささやき)」第1集・第2集 アムステルダム西教会売店(アンネフランクの家の横)にて好評発売中。メールオーダーも可能。
orgel@bonifaciuskerkmedemblik.nl

■ CD右：「癒しのパイプオルガン」